

年報第4号刊行にあたって

心理科学研究センター研究代表者代表
人間科学部心理学科教授

長田 洋和

平成23年度に文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業として選定された研究プロジェクト『融合的心理科学の創成：心の連続性を探る』も、早いもので4年が経ちました。

昨年度に提出した中間評価の結果では、2名の審査員双方から“A評価（確実な進捗が見られる）”をいただくことができました。審査員からは「心理諸科学の融合を目指し、心理統計の新しい手法を提案した成果は内外の研究者から注目されている。これまでにあまり例のなかった日本全国を対象とした大規模なこころの病に関する心理疫学調査は、データそのものが貴重なものとなる。」とのコメントを頂戴し、本プロジェクトの特徴が十分評価されていると実感いたしました。

さらに、今年度は本学全体が、大学基準協会からの評価を受ける年でもありました。最終的な回答はまだ得られてはいませんが、10月に社会知性開発研究センター副センター長としてヒアリングに出席した際には、本プロジェクトも含め、社会知性開発研究センターの活動全体に対して高い評価の言葉をいただきました。

平成26年度第1回シンポジウムは、9月6日に神田校舎において、岡田研究員を中心に国際シンポジウムとして開催しました。「Big Data in Psychological Science and Related Disciplines—心理学と関連諸領域におけるビッグデータ—」と題して、近年社会の大きな関心事となっている「ビッグデータ」をテーマに「ソーシャルネットワーク」「教育評価」「発達・予防疫学」など、心理学と密接に関係する諸領域においてビッグデータ解析を行っている国内外の研究者を招聘し、講演を行っていただきました。第2回シンポジウムは、11月8日に、大久保研究員を中心に「Face and communication: Cognitive basis and its evolution —顔とコミュニケーション：認知の基盤とその進化を探る—」を開催しました。米国2AI Labs 共同代表の Mark Changizi 博士による「顔と自己」をテーマとした基調講演が行われたほか、「顔の選好」や「利他行動」といった身近なテーマについて、国内外の認知神経科学や比較行動学分野の研究者による講演が行われました。いずれのシンポジウムでも、多くの学外の方々に参加いただくことができ、本プロジェクトの研究成果を社会に還元することができたと考えます。

前年度に引き続き、各センター員の研究成果は、国際的な欧文学術論文誌や国内の伝統ある査読付き論文誌に採択されていることに加え、国内外の学会でも積極的に発表することで、本プロジェクトの成果の発信を続けています。来年度は最終年度となり、5年間の研究プロジェクトの集大成としてのシンポジウムを開催するなど、研究成果のまとめを公表する予定です。